

攻撃行動に関する研究

松田 悠希

指導教員 三船恒裕

研究背景

社会では、傷害などの街頭事件から国家間の紛争まで、幅広い攻撃行動が報告されている。社会の中では、数多くの集団が存在し、集団では協力行動など前向きな現象が見られる一方で、紛争や戦争などの争いに発展することもある。集団間の攻撃行動を検討することは、紛争等の国際問題への更なる理解を深めることから重要だと考える。

研究目的

本研究は、内集団内で関係性が構築されているかどうかを代理報復行動に与える影響について検討することを目的とする。具体的には、神経衰弱ゲームを通じて相互的な関係性を形成した集団条件と、個人でゲームを行った個人条件を設定し、対戦計算ゲーム後に外集団成員へ課す罰金額を代理報復の指標として比較する。

研究方法

本研究では、Qualtrics を用いてオンライン調査を実施した。参加者は、実際の実験に参加した状況を想定して回答する場面想定法を用いて、アンケートの回答を行った。

分析結果

本研究では、仮説1について内集団の信頼関係の有無が、代理報復行動に与える影響について有意でなかったことが示された。また、仮説2の集団同一視が個人条件と集団条件の差が有意であったことが示された。

考察・結論

今後の研究の展望として、集団条件における神経衰弱ゲームの信頼関係の形成が十分に機能していたかどうかについては疑問が残る。今後の課題として、より詳細な実験デザインを考える必要がある。